

オリエンテーリング指導、山岳遭難対策、そしてTV出演。



霧ヶ峰ロケイニングを走る TEAM 阿闍梨の田島利佳と村越 真。わずか 1 点差で 5 時間混合の部優勝。(2011 年 7 月 3 日)



View3: 原発のニュースと未熟なナビゲーション

学生のランニングオブザベーション(走りながらのオリエンテーリングの様子)の観察をした。はっきりした特徴がある場所での走りは一月前と比べて格段に良くなった。元々不整地でのフィジカルは悪くないので、これが安定できれば、女子のトップレベルだって狙える。

一方で、曖昧な場所になると途端にスピードが落ち、立ち止まって地図を眺む回数が増え、動きがおぼつかなく

なる。想像はできたが、それを確認するために考えていることを「実況中継」しながら走ってみてもらうことにした。トレーニングの一環で行うことがある「スピーキング0」という手法だ。

彼女はルート上の特徴を地図から点状に読み取る。いわば事実の羅列なのだ。しかし、この先どうなるのか、周囲にどんな特徴的なものがあり、進路をそれとどうなるかについて、ほとんど言葉にできない。未知の自然の中では進路が思い通りにならないことは常だから、その誤差を予想し、それに伴うリスクを想定するとともに、そのリスクをコントロールしなければ、自然の中のナビゲーションに成功はない。世界中から懸念を抱かれている日本の原発対応やそれについての報道みたいだ。

ラフとファインに対する考え方を打ち合わせていないことにも衝撃を受けた。ナビゲーションでは、上記の理由から、誤差によるロストのリスクを正確に見積もることと、それに伴ってリスクを高いレベルで管理しなければならない区間をファイン、そうでない(リスクを管理しなくていい)部分でラフと呼んでいる。より高いレベルで走る上での必須の考え方だ。

彼女はファインはやっているというが、行動を観察し、やっていることを聞き出し見ると、単にラフを短い区間で繰り返しているだけなのだ。つまり、ちょっとだけ動き、立ち止まり周囲を見て、その特徴からいる場所を地図上で確認し、次の区間に移動する。細かいリロケートを断片的に繰り返している。確実な手段と精度の裏付けによって、ある場所に着くことを保証する本来のファインとは別ものである。これも原発対応みたいだ。

彼女のオリエンテーリングを解きほぐすことで、僕は自分が当たり前のようにやり、そして時にはできていないことを明確に意識することができた。ラフとファインについても改めて考え直すことができた。それ以上に、ナビゲーションの発想が、未知を含む事象への対応を考える参考になることを、改めて意識できた。

オリエンテーリングがなかなか普及しないのも、かつて宝探しのように変質させられてしまったのも、こういう

文化風土と無縁ではないのかもしれない。だとすれば、日本の社会全体を考え直さなければならない今こそ、オリエンテーリングの出番があるのかもしれない。

View4: バトルトーク

6月の半ば、漫才コンビの爆笑問題がホストを務める「日本人の教養」のゲストを務めることになった。4月くらいから地元のNHKのディレクターが来て、登山遭難の話や地図読みスキル、方向感覚の話などをしていただいたのだが、結局方向感覚ネタでいくことになった。

方向音痴ネタは3年に一度くらいブームになって、数局がバッティングというケースも希ではないのだが、最近では極力断る。方向音痴ネタが扱われるのは情報バラエティー番組で、視聴者が一瞬楽しめればいいというスタンスで作られることが多い。その先の広がりや期待できないし、得るものが何もないからだ。今回、出演することにしたのは、前に一度だけみたこの番組のインパクトが強かったからだ。その回は、錯視の研究では世界的にも知られている北岡さんという方がゲストだったので、見たのだが、そこで太田が、素人的な表現ではあるが錯視現象の本質を突くようなコメントをしたのだ。この二人がホスト役なら、生産的な何かが生まれるに違いない。彼らは、基本的に撮り直しが嫌いなので、一発勝負というのも楽しみだ。

2時間半しか拘束できない人気芸人を呼ぶので、ディレクターの準備も細部にわたる。一応の台本はある。田中だけがそれを読んでいて、太田の話が大きくそれると、引き戻してくれるらしいのだが、「基本的には台本の通りには進みません」、「彼ら、自分たちがホストだなんて思っていませんから、バトルトークのつもりでやってください」というディレクターとデスクの言葉に期待が膨らむ。

待ち合わせ場所から、研究室の学生が僕の部屋に連れて行くという台本になっているが、実はそこから実験が始まっている。約200mほど建物内を歩くと「爆笑問題殿。これは実験だ。元の場所に間違いなく戻られたし」という

看板があるというしかけ。僕は三脚を担ぎ、クルーに混じって彼らの様子を観察する。彼らはいきなり、反対方向の廊下に行こうとしたり、目についた階段を下りようとする。いずれも方向オンチの人の典型的な行動だが、彼らがネタでやっているのか素でやっているのかつかみかねる。

彼らの帰路の様子を振り返った後、方向オンチなら、地図を使って見ましよう、ということで地図の整置やらコンパスの利用がちらっとだけ写る。僕としてはここをメインにしたかったのだが、スキル系の内容だけに番組にするのは辛かったのかもしれない。残念なところだが、仕方あるまい。「整置では、地図を回すんじゃないくて、自分が回るイメージで」というと、田中はすんなりできた。

地図を使って大学内で一番高い三角点のある広場に行き、そこで「緑陰対談」となった。これがノーカットの70分。いつもはある程度方向性を仕切る役にある田中が、この日は太田のミミズ攻撃にびびっていたのか、ちっとも収束させてくれず、話はぐるぐる同じところを話題を変えながら周り、そのうち太田が宇宙からの背景放射(だったかな?)の話を始めて、周囲にいたスタッフも、「?」。全く好き勝手な話をしていても考えられるが、彼のこの日の行動と照らし合わせてみると、彼にとって空間とはどのようなものかが見えてきた。

私たちが空間の中をナビゲーションできるのも、至る所に目印となり場所の識別子となるものがあり、それらが上下、東西南北といった軸によって構造化されているからなのだ。

だが、太田は空間の構造には全く興味がなく、ただ空間のある地点に何かがあり、そこに自分の関心が向く場合にのみ、その地点に興味を持つ。そう考えると、彼らが方向オンチである理由も理解できる。もちろん私たちの住む空間はどれだけ歩き回っても安全で、分らなければ様々な支援を周囲から受けることができるからこそ、そういった行動も可能なのだろう。方向オンチの人は意識的にか無意識的にか空間構造への興味関心を無視しているのだが、それを極端に押し進めたのが太田だったのだ。それは太田が現代漫才の世界で成功している最大の理由かもしれない。

普段、僕が生活する世界の多くの住人とは対極的な考え方をする人との対話は刺激的であったが、プロの話し手との70分間でぐったり。



このかっこでクルーに混じって爆笑問題の行動を観察。黒系のポロシャツといい、茶髪といい、クルーにすっかりなじんでいた。

View5: リスクマネジメント

同じクラブのHさんが、霧ヶ峰ロゲイニングで倒れた。心筋梗塞の一步手前。救急車で搬送され、約2週間の入院。普段から持久系のスポーツをこなしているHさんがレース中そのような状態になったことにショックを受ける。

2006年以来、心臓系突然死2件、事故死1件がオリエンテーリングで発生している。それまでに死亡事例は全くなかったことを考えると、かなり気になる実態である。医師である愛場さんが常に主張しておられるが、オリエンテーリングはリスクの高いスポーツである。完全に管理できない自然の中で行われていることと、競技者が常に見られている訳ではないという2点は、とりわけオリエンテーリングのリスクを高いものにしている。その一方で、それに対する自覚がオリエンティアにも運営者にも乏しいように思える。最近僕が行った調査では、トレイルランナーの安全管理意識は登山者と比べて随分低かったが、低さという点ではオリエンティアもひけをとらないように思う。

医療従事者の本部への常駐はもちろんのこと、多くの場合、緊急事態に真っ先に直面するのは他の競技者なのである。自分のためというよりも他者のために救急法の最低限の知識と覚悟は持っておきたいところだ。



雄大な自然の中の競技は楽しい。しかしその楽しさはリスクとは裏腹である。



霧ヶ峰ロゲイニングの前日に行われたナビゲーション講習会。20名もの参加者を集め大盛況。

(村越 真)